

本誌 2016 年 6 月号掲載

授業を進化!

思考を深化!

実践
アクティブ・ラーニング

日本史

仲間と普遍的な問いに向き合う中で
知の統合化を図り、
人間的な成長を実現する

●2年生「日本史」の授業には、志望進路が異なる複数のコースから生徒が参加。この日は元禄文化をクローズアップし、「元禄期の文学」「儒学の興隆」「諸字問の発達」の3つのテーマ別にグループ活動を行い、最後に一人ひとりが「あなたが元禄の人なら、文化とどうかかわったか?」を考えた。(P.29に授業デザインを掲載)

9:50 授業開始



授業開始の前に、前川先生が各グループに水性マーカー、模造紙1枚、A4サイズの白色用紙数枚、そして授業プリントを配布。模造紙はポスター発表、白色用紙はKP法(紙芝居プレゼンテーション法)(※1)で使用する。学習の成果をどちらの手法で発表するかは、各グループが自由に選択できる。



福岡県・私立明光学園中学校・高校

前川修一 まえかわ・しゅういち

教職歴21年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。

高校では、日本史、倫理のほか、学校設定科目の「キャンパスデザイン」(キャリア教育)を担当。

アクティブ・ラーニングの実践は2年目になる。

前川先生のアクティブ・ラーニング

細かな知識の収集よりも
「思考のひっかかり」を重視

2015年9月から日本史の授業でアクティブ・ラーニングを行うようになった前川先生。それまで、教師による説明中心の授業を受けてきた生徒たちからは当初、戸惑いの声も上がったという。だが、授業での教師からのインプットの時間が明らかに減ったにもかかわらず、模

福岡県・私立明光学園中学校・高校

◎「真実にして、^叡智に富み、義務を重んぜよ」を校訓に、カトリックの精神に基づく全人教育を展開。地球的視野で物事を思考し、実行できる人材の育成を目指す。また、様々な国際交流プロジェクトを通して実践的な語学力を育む。

◎設立 1952(昭和27)年

◎形態 全日制/普通科(ソフィア、選抜英語、総合進学、総合音楽、総合美術の5コースを設置) / 女子

◎生徒数 1学年約80人

◎2016年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京芸術大、九州大、佐賀大、大分大、名古屋市立大などに合格。私立大は、上智大、法政大、立教大、同志社大、立命館大などに合格。

◎URL <http://meiko.p-kit.com/>

※1 公益社団法人日本環境教育フォーラムの川嶋直氏が開発した思考整理とプレゼンテーションの手法

P.26～29は、本誌2016年6月号「授業を進化! 思考を深化! 実践アクティブ・ラーニング」(P.32～35)を再掲載しています。

10:02 グループ活動



生徒が4、5人ずつ、合計3つのグループに分かれて、各グループが「元禄期の文学」「儒学の興隆」「諸学問の発達」の中から1テーマを担当してまとめる。前川先生は机間巡視しながら、「大枠をつかめばいいよ」「教科書の内容をそのまま写しても意味がないよ」と生徒に声をかける。

9:52 前時の振り返りと本時の問いの提示



前回の授業時に生徒が10文字以内で記述した「中学社会」の記憶に基づく「元禄の印象」を、前川先生が白色用紙に箇条書きし、それを黒板に貼りながら前時の振り返りを行った。その後、この日の授業での最終的な問いである「あなたが元禄の人なら、文化とどうかかわったか？」を生徒に提示。

試や校内テストの結果が悪化することはなく、むしろ記述式の問題に最後まで解答する生徒が増えるなど、思考に粘り強さが生まれていることを生徒も実感するようになっていった。

「授業での知識のインプットが減っても成績が落ちないのは、授業内で『思考のひっかかり』がたくさん生まれているからだと思います。例えば、今日の授業だけで『元禄文化が整理された』と言い切れる生徒はいないでしょう。しかし、授業の1シーンや誰かの言葉など、何か心に残ったものがあれば、後日、定期考査などの勉強で教科書やプリントに戻った時に、理解の進み方が違うのではないかと思います」

アクティブ・ラーニングを授業で行うようになったことで、生徒は授業の中でも、他者ともっと知的に、密接につながりたいと思っていることに、教師である自分自身が気づいたことも大きな成果だと前川先生は語る。

「どの生徒も学びたがっていますし、自分の考えを話したがついています。ただ、授業のスピードについていけなかったり、教師やほかの生徒の目を気にしたりして、思うように発言できなかったりだけなのです。グループ活動に慣れた今では、生徒は自分と違うペース、観点で思考する人との協働作業を楽しんでいます。授業中の居眠りもありません。また、教壇に立つ私も、生徒同士がつながった学びを支援するというこれまでにはない喜びを味わえています」

仲間と、そして教師と 学び合いながら知を統合する

前川先生の授業では、「個別での知識の収集」よりも「集団での知識の統合」を重視している。この日も、前川先生による前回の授業の振り返りは、KP法を用いて簡潔に行われ、その分、グループでのまとめ、発表に多くの時間が割かれた。

「他者と話し合い、説明することで、知が統合され、自分の中に知識が定着します。だから、グループ活動にはしっかりと取り組ませたいのです。アクティブ・ラーニングで一番重要なことは、ともに学ぶ他者が存在することです。自分1人で分かったような気になるのではなく、誰かと相談したり、誰かに説明したりするなど、他者との関係の中で学びが成立することに大きな意味があります」

今回の授業では、グループごとに異なるテーマを深めていったため、個々の生徒が理解するのは、基本的には自分が所属するグループの担当テーマについてである。しかしながら、担当テーマをじっくり考察して歴史の捉え方をつかむことで、ほかのグループの発表を聞いた時に全体像が理解しやすくなり、後日、テスト勉強などで教科書やプリントに戻った時の全体理解が一気に深まると前川先生は説明する。

「ほかのグループの発表と併せて、発表に対

10:20 各グループの発表



各グループ最大3分で発表を行う。ポスター発表を選んだのは1グループ、KP法を選んだのは2グループ。グループの発表が終わる度に、前川先生は間違いがあれば指摘し、さらに、「なぜ、同じ儒学がこんなにいろいろな派に分かれたの?」などと、教科書には答えが載っていない質問を生徒にぶつけた。

10:15 グループ活動が佳境に



グループ活動開始から10分が過ぎた頃から、各グループでの発表準備が佳境を迎える。各グループは、「あ、ごめん!」「大丈夫、大丈夫!」「やばい!」「O K、いけるよ!」などと声をかけ合いながら作業を進める。前川先生は「細かいことは書かないでいいよ!」とさらに声をかける。

する私の質問を聞くことで、ほかのグループのまとめた内容が理解できたり、全体像に関心を持つたりするきっかけになります。教科書に書いてあることを確認するような質問ではなく、人間の営みを普遍的に考えるような問いを心がけています」

思考の活性化・深化への配慮

深く考えたくなくなる問いを投げかけ 短い言葉でまとめさせる

授業の成果として、「思考のひっかかり」をそれぞれの生徒が得られるように、前川先生は「10文字以内での記述」をしばしば生徒に求める。例えば、今回の授業の冒頭で行われた前回の授業の振り返りでは、元禄時代の印象を「娯楽が多い」「学問が発達」「文化の担い手が多彩」など、様々なキーワードで示したが、それらは全て、前回の授業後に生徒が提出した「リフレクションシート」の中から前川先生が抽出したものだ。

「10文字以内と区切るのには、だからだと考えさせたくないからです。10文字という制限があることで、本当に言いたいこと、大切なことを見抜けるようになります」

また、毎回の授業で提示する「問い」も、生徒の思考が深まるものであるよう、十分配慮する。今回の授業での「あなたが元禄の人なら、



実際に絵巻物を見ながら授業を行うこともある。「絵画資料は、生徒が考えたくなくなる問いを立てるのに便利」という前川先生。16年度は、絵画資料を生かしたアクティブ・ラーニングの研究を進めるという。

文化とどうかわかったか?」という問いも、「深く考えたくなくなるような漠然としたものであることが肝心」と前川先生は説明する。「歴史的思考力を培うために必要なものは、現代的な視点です。だから、私は『自分だったらどうするか』をよく生徒に問います」

場づくりへの配慮

グループ意識の徹底で 安心・安全な学びの場ができる

前川先生の授業で特に印象的なのは、グループ活動に取り組む生徒が盛んに声をかけ合うことだ。活動の終盤、発表に向けてまとめを行う

授業デザインシート

【教科・科目】日本史B

【設定時数】10 時間中の9時間目

【分野・単元】幕藩体制の展開

【本時全体の目標】元禄文化の特徴をつかむ

【テーマ・作品】元禄文化

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
授業の目的と目標	この授業の目的、及び目標を理解し、授業の達成点をどこに置るか確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 技能 主体性 	【教師】 この授業の目的、及び目標を理解できるよう、授業の達成点をどこに置るか分かりやすく提示する。 【生徒】 この授業の目的、及び目標を理解し、授業の達成点がどこか確認する。		短く端的に、分かりやすく提示する。
先週の問いとその答えを共有する	<ul style="list-style-type: none"> 振り返る力 オープンクエスチョンにより促される歴史的思考力 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 	【教師】 前時に考えたことを共有させ、元禄という時代を「自分事」として考えさせ、歴史的思考力を培う。 【生徒】 自分以外の生徒がどう考えたのか認識することにより、自分の考えをさらに深める。	前時の問いにみんながどう答えたか見てみよう。	本時の導入につながっている点を共有する。
元禄文化の特色(講義)及び本日の問い	<ul style="list-style-type: none"> 傾聴することにより思考を整理する力 オープンクエスチョンにより促される歴史的思考力 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 	【教師】 KP法(紙芝居プレゼンテーション法)を用いて、元禄文化の特色について簡単に講義する。本日の問いを投げかける。 【生徒】 講義を傾聴し、疑問点を整理する。出された本日の問い(「あなたが元禄の人なら、文化とどうかわったか?」)を考え始める。	あなたが元禄の人なら、文化とどうかわったか?	KP法を用いて、文化全体の概観が次の作業につながるように心がける。
元禄文化の諸要素「文学」「儒学」「諸学問」について学ぶ①【エキスパート活動】	仲間と協力して知識を整理し、アウトプットに努め、課題を解決する力	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 主体性 多様性 協働性 	【教師】 グループ学習・発表のやり方を説明し、机間巡視とともに適宜介入して作業を促す。 【生徒】 4人グループをつくり、元禄時代の「文学」「儒学」「諸学問」についてまとめ、グループで発表の準備をする。発表の仕方については、ポスターまたはKP法(紙芝居プレゼンテーション法)のどちらかを選ぶ。	何を見てもよいです。時間内に終わらせよう。図式化大歓迎!	作業する人とならないように、細かく分担させる。
元禄文化の諸要素「文学」「儒学」「諸学問」について学ぶ②【ポスターツアー(KPPT)】	仲間と協力して知識を整理し、課題に対する答えを表現する力	<ul style="list-style-type: none"> 表現力 主体性 多様性 協働性 	【生徒】 4人グループでポスターまたはKPPT(KP法によるポスターツアー)の方法で数分ずつ発表する。発表しないグループは傾聴し、適宜質問する。 【教師】 生徒からの質問が出ない場合は適宜、オープンクエスチョンによる質問を投げかけ、次時までに考えさせる。	なぜ、儒学は多くの学派に分かれたの?(などの質問を適宜ぶつけ思考を促す)	発表するグループと、聴く側のグループが学び合えるように質問を促し、思考がさらに深まるよう教師からも質問する。
確認テスト	<ul style="list-style-type: none"> 知識を整理し、定着する力 仲間と協力して、問題を解決する力 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 	【生徒】 <ul style="list-style-type: none"> まず個人で思考する。 分からなかったら仲間聞く。聞かれた生徒は自分の考えを説明する。 チームで満点を目指す。 	チームで満点を目指そう!	チームで満点を取れるよう促し、達成感を持たせる。
リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> 課題を考える力 全体を振り返り、整理する力 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 主体性 	【生徒】 <ul style="list-style-type: none"> 全体を振り返り、知識の定着を図る 次時への課題・関心につなげる 		「質より量」を意識させ、なるべく多くの言葉を記させる。

*前川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

時、あるグループでは、書き損じた生徒が「ごめん!」と口にする、ほかの生徒が次々に「いいよ!」「大丈夫!」と即座に返し、別のグループでは、「時間、まだあるよ」などと互いに励まし合う声が聞こえた。

「短時間でグループでまとめるためには、下書きをしていると間に合いませんから、ほとんど書き進めていかないといいけません。最初は、なかなか手が動かさず、時間内にまとめられないグループもありました。しかし、グループで協力して1つのものを完成させるという意識が徹底してくると、作業がはかどるようになり、声かけも盛んになっていきました。授業では、自分の力だけでなく、みんなの力で問いに向き合えばよいのだと私が繰り返し説明することで、授業は生徒にとって安心・安全な場へと変容します。だからこそ、『ごめん』『大丈夫』といったやり取りが可能になり、いろいろな意見を認め合うことができるのです。そして、そういった場をつくらなければよりよい意見が得られないことも、生徒は体験的に理解しています」

教科の学びと社会で生きるための力の育成が並行していることが、アクティブ・ラーニングの魅力であると語る前川先生。

「アクティブ・ラーニングに取り組む前は、それが遠回りの指導のように思ったこともあり。しかし、生徒の人的な成長という意味では、一番の近道なのだとは確信しています」

前川先生の授業に、その後どのような変化が?